

成果報告書

記入日 2024 年 4 月 25 日

フリガナ (シブヤ サヤカ) 氏名 渋谷 明香	渡航先国名・地域 タイ王国	所属機関 アジア工科大学院
研究テーマ：東南アジア出身の女性監督による映像表現の課題と展望——バンコク「Purin Pictures」に着目して——		
研究期間：2023 年 3 月～2024 年 3 月（1 年 0 ヶ月）		
研究成果（概要） これまで着目される機会の少なかった東南アジア出身の女性監督にフォーカスを当て、現代の映画制作の担い手が直面してきた映画産業への参入障壁や、表現の自由に対する課題を明らかにした。さらに、1950 年代から 2020 年代までのタイ映画における女性の取り組みを記録し、タイ映画の理解を深めると同時に、女性映画制作者の功績を再評価し、映画史の中での彼女たちの位置づけを再考した。		
研究成果（詳細） (1)タイ国立フィルムアーカイブ(TFA)での文献調査および映像調査 バンコク中心部から西部に約 25km 移動した距離にあるナコーンパトム県サラヤに位置する国立フィルムアーカイブにて、文献調査と映像調査を行った。調査中は、女性監督が制作したとされる 1950 年代から 2020 年代にかけての映画の作品リストを作成したが、特に、1970 年代の民主化運動、1998 年以降の経済発展などの地域の文脈を踏まえた作品の担い手に、女性が多く含まれていたことは大きな発見であった。特に、1976 年にタマサート大学で起きた大虐殺に関連したインディペンデント映画、アノーチャ・スウィチャコーンポン監督の受賞作『By The Time It Gets Dark』(2016)、そしてピンパカ・トウィラ監督による、タイ深南部が舞台となるロードトリップ映画『The Island Funeral』(2015)といった興味深い作品に触れることができた。また、調査には、タイ国立フィルムアーカイブが 2019 年に主催した映画祭“When Women make Movies”の開催記録も使用した。今後は、この初歩的な調査を通じて、タイの映画の理解の枠組みを提供すると同時に、女性映画制作者の経歴を再構築し、映画史の流れの中に位置付けなおすことを試みていきたい。近年、日本では「日本映画における女性パイオニア」プロジェクトが発足し、日本の映画界で活躍した女性たちの業績を再評価する取り組みを行なっている。監督にとどまらずプロデューサー、脚本、美術、衣裳、ヘアメイク、照明、撮影、演技指導、助監督、スクリプター（記録係）、音響、編集、特殊効果、宣伝・広報、字幕作成、映画館経営、映写、受付、案内係、映画解説、など多くの役割・職能で女性が働いていた記録を辿るプロジェクトを進めている。よって、本研究も、タイの映画界における女性の役割や業績を世界に紹介し、国際的な映画コミュニティとの交流を促進することで、女性映画制作者のネットワークを構築し、共同の課題や可能性に対処するための枠組みを構築したい。		
(2)アノーチャ・スウィチャコーンポン監督へのインタビュー グローバル化するタイ・インディペンデント映画界において、タイ・ニューウェイブ以降の世代を代表する監督、アノーチャ・スウィチャコーンポンの映画制作に関わるトランスナショナルなネットワークを探求した。		

東南アジア圏の若手映画監督らへの制作支援を行う民間映画基金「Purin Pictures」の共同ディレクターでもある彼女は、国内の助成に限られた状況下で、ヨーロッパを中心とする国際映画祭から資金を取得するなど、トランスナショナルなネットワークを活用して制作を続けており、2023年時点で、長編作品を3作品、短編作品を15作品（共同制作を含める）発表してきた。よって、タイ滞在期間は、アノーチャ・スウィチャーゴーンポン氏に半構造化インタビューを実施し、映画産業への参入障壁や表現の自由に関する経験や見解を探ると同時に、彼女の制作方法やキャリア維持における要素についてインタビューを複数回行わせていただいた。

(3) ショートフィルムキャンプの参加

「Purin Pictures」は、東南アジア地域の映画制作者に対する支援を目的として2017年に設立された民間映画基金である。具体的には、制作資金の助成、ポスト・プロダクション支援、その他イベントの資金提供を行っているほか、東南アジア出身者の若手映画監督の育成も積極的に行っている。2023年12月に行われたショートフィルムキャンプは、主にタイ大陸部に位置するカンボジア、ラオス、ミャンマー、タイから集まった監督・プロデューサー2名1組で組まれた12チームが、1週間にわたるプロの映画製作者からの指導を受け、脚本の書き方や、監督、プロデュースのスキルを向上させる集中コースであった。プログラムの最終プレゼンテーション後に審査員らから選出された4組には、5,000USドルの制作資金と、White Light PostとKantana Sound Studioからのポストプロダクションの支援を受けることができる。さらに2組の優秀者は、釜山国際映画祭の招待状を受け取る権利を得る。「Purin Pictures」が主催するキャンプに参加し、ベテランでノウハウのある中堅・ベテランの関係者らが、若手の監督たちにとって事実上のメンターとしても機能していることと、年間を通じて東南アジアのインディーズ映画の上映と配給活動もサポートしていることが明らかとなった。



ショートフィルムキャンプの最終日の様子

(4) 語学学習

チュラロンコン大学が提供するタイ語集中プログラムを受講し、基礎レベルの文法、リスニング、読解に励んだ。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中特に印象的だった経験は、第一に、2023年5月に行われたタイ下院総選挙であった。反軍事政権や王室の不敬罪改正などの革新的な政策を掲げたMFP(前進党)は、ピタ・リムジャロエンラット氏を首相候補として国民投票で選出したが、上下両院の投票で必要な過半数に達せず、首相に選出されなかったという事態が生じた。さらに、憲法裁判所はメディア企業の株保有に関する提訴を受けピタ氏の議員資格を一時停止し、再度の首相指名選挙に立候補することを認めない判決を下した。この時期は、大学院の新学期前の休暇中であり、私は、バンコクにてタイの友人らとルームシェアをしていた。これらの一連の流れを受けて、友人は自らの声を上げるために、仕事の合間を縫ってスクンビット周辺の反体制デモに足を運んでいた。私は、友人らの安全が守られないのではないかととても不安に思っていたが、彼女らの頻りに更新されるSNSの情報を追うことしかできなかったことを今でも鮮明に記憶している。また別の日には、アジア工科大学院からバンコク市内に移動するため、“ロットウー”と呼ばれるミニバンを利用している際、発着場所である戦勝記念塔の前で車やバイクによる大規模なデモ行進に遭遇した。(“ロットウー”は、タマサート大学から発着していたミニバンであり、片道40バーツ(160円程度)ほどで学生にとって本当に便利な交通手段だった。)フェイスブックやSNSを通じて、人々がスポット的に集会して解散するという貴重な機会を凶らずとも経験できた上に、緊張の伴う地域の社会的な動向についても学ぶことができた。

第二に、ミャンマーの情勢である。タイに隣接するミャンマー連邦共和国では、軍事クーデターから3年を経て、市民の抗議デモが続いており、悲しいことに、状況は更に悪化していると感じる。実際に、私が所属していたアジア工科大学院ジェンダー開発学専攻の2023年の新入生の大半がミャンマー出身の方であり、自国の社会人経験を積まれた方々ばかりであった。私は、優秀な友人に囲まれて毎日講義に出席し、グループワーク等を日々を経験できたことは非常に学びになった一方で、自国の状況で国外に流出せざるを得ない現状を痛感した。日本に帰国しても、ミャンマーの状況に対する関心や支援の手段を模索していきたい。



アジア工科大学院(AIT)の皆さんと

今後の社会貢献

第一に、フィールドワークで得られた成果を修士論文として早急にまとめたい。その中には、タイの映画界における女性の役割や業績を世界に紹介すること、そして、国際的な映画コミュニティとの交流を促進し、女性映画制作者のネットワークを構築することを目指していきたい。

第二に、文化交流の促進である。今回の調査を通じて、映画制作の現場には、多額の資金やノウハウが必要であり、私のような学生の立場では、お世話になった調査対象者の方々に直接的な恩返しをすることは難しいという実感を得た。よって、これからは資金や人脈のネットワーク広げ、持続的にアジア全域の文化芸術への貢献・還元を目指していきたい。そして、今回インタビューを実施できたのは、タイの映画業界で活躍するわずかな監督・プロデューサーであったが、その中の数名の監督とプロデューサーは、2025年に来日し、日本国内で撮影を予定している。その際には、通訳や生活支援等のサポートを惜しまず提供したい。今後も、国際的な映画コミュニティとのつながりを強化し、文化交流を促進していく役割を果たしていきたい。